

景観フォーラム

巻頭言

近代化という現象が景観まちづくりにとって非常に大きな影響を与えており、この問題を避けては「景観とは何か」「まちづくりとは何か」という問いに答えられないのではないのでしょうか。それではこの近代化とはいつごろ始まったかと言えば、経済学・歴史学など色々な観点から提示されておりますが、大体はヨーロッパにおける14世紀ないし15世紀の頃かと言われております。とすると、現代はこの近代化が始まって、5百年ないし6百年経っていることになり、これは経済史から考えますと資本主義の歴史に合致いたします。

さて、最近の欧米諸国がとってきた0金利政策を日本も実施し始めて3年が経とうとしております。この政策を実施している国々はまさに近代化という社会改革を率先して牽引してきた諸国であるかと思えます。まさに先進国と称されている国々ですが、その資本主義社会システムというのは金が金を生む社会であるとすれば金利がないという社会は資本主義社会システムではないのではないかと疑いたくなります。この現象は、政策の手詰まり感というものではなく、もしかしたら、資本主義社会システムの終焉か、もしくは近代社会の終わりであるか、という問いが成り立ちます。

資本主義社会システムというのは、当の国が繁栄するためには必ずその繁栄のためにどこかの国からその富を取ってこなければなりません。そのどこかの国というものがなくなってしまったなら、宇宙空間に出るか、または自国の中から見つけなければなりません。最近、日本社会でも起こっている格差の広がりというものがその証明かもしれません。現代社会の諸々の現象を、この資本主義社会システムで考えることは非常に重要なことではないかと思われまます。そして今こそ、そのような観点から、まちづくり、即ち、“景観から考えるまちづくり”を考えてみてはいかがでしょうか。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2016年度*（平成28年度）年間スケジュール>

*2016年度とは2016年4月1日⇒2017年3月31日のことです。

2016年

- 4月 8日（土）**景観セミナー**：2月19日（金）戸谷先生によるセミナーの第2回目 於JICA研究所
- 4月27日（水）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 6月22日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 前編』 於JICA 大会議室
- 7月 2日（土）**景観まちあるき**：板橋区（御担当：豊村さん）
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）
- 9月21日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 後篇』 於JICA 大会議室
- 10月26日（水）第2回理事会 於JICA研究所
- 11月12日（土）**景観まちあるき**：世田谷（御担当：東海林さん）
- 11月30日（水）**景観セミナー**：町並みの構造 講師高山さん 於未定
- 12月14日（水）忘年会

2017年

- 1月18日（水）**景観セミナー**：世界の自然保護の現状（例：ミャンマーの景観） JICA
- 2月15日（水）2016年度：景観町づくり活動のまとめと来年度への提言 於未定
- 3月 春休み（運営委員会開催予定）

★**景観まちあるき**：10月に予定しておりました景観まちあるき世田谷編（御担当：東海林さん）は11月12日に変更となりました。

フィンランド共和国の景観紹介（その1）

NPO法人日本景観フォーラム 理事
フィンランド健康福祉センター・FWBCフィンランドOy 東京事務所代表 石見茂夫

1. はじめに

フィンランド大使館からケアコンセプトを日本に紹介する業務協力を要請され満10年になりました。当初フィンランドについてほとんど知識のない私に大使館の商務官からまずフィンランド共和国のいろいろ事を知って下さいとアドバイスを受けました。ケアコンセプトを紹介するのに、そのコンセプトが生まれた国の背景を知ることは必要不可欠のものでした。30年以上にわたり景観デザインやランドスケープの仕事をして来た私にとって、フィンランドを代表する建築家のアルバー・アールトはたいへん興味深い存在であり、長年の業務経験のある景観デザインや建築の分野から勉強を始める事にしました。

一般的に北欧のデザインは洗練されていてカラフルで暖かみがあり人工的なものが多いと言われてい



が、フィンランドは景観が良好な自然豊かな国なので森や樹木、湖、海などをモチーフとしたデザインも多くみられます。

限られた紙面の中でより多くの情報をお知らせしたいと思い、フィンランドの国の紹介、景観ランドスケープ、ケア、教育、文化など多方面にわたり数回の連載で写真を用いて紹介致します。

出典: Find out about Finlandから(フィンランド大使館広報部)

2. フィンランド共和国の紹介

フィンランドは日本の西約8,000Kmにある北ヨーロッパの東端にある日本の9割程(33.8万平方キロ)の国土を持つ森と湖が多い国です。

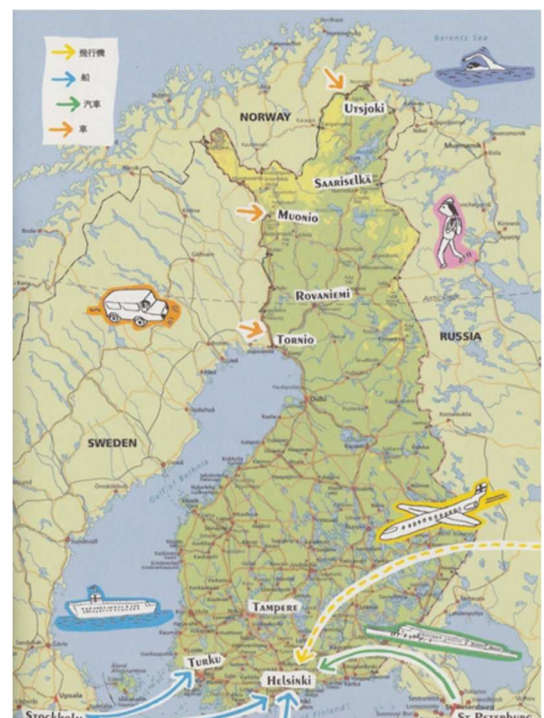
人口は約549万人(2016年4月)で日本の1/23ですが毎年増加しています。最大都市で首都であるヘルシンキ市が約62万人です。

長年スウェーデンやロシアの支配下にありましたが1917年フィンランド共和国として独立しました。

公用言語はフィンランド語ですが、スウェーデン寄りの一部区域(人口の5.4%)はスウェーデン語を使っています。フィンランド語は日本語と同じアルタイ系言語で文法が似ていて他のヨーロッパ諸国のゲルマン系言語とは異なります。

宗教は福音ルーテル教が8割をしめ、少数だがフィンランド正教も国教となっています。

1995年にEU(欧州連合)に加盟し、2002年から北欧4か国では初めて通貨にユーロを導入しました。



主な産業は国土の69%（日本とほぼ同面積比率）を占める森林資源（木材、パルプ）を活用した林業、ノキアを主としたIT関連産業、コネのエレベーター・エスカレーター等の機械産業、鉱山業、大型客船の建造等の造船業など多彩にわたっています。

近年はフィンランドデザインを生かしたテキスタイル（マリメッコ、イバナ・ヘルシンキ）、食器（アラビア、イッタラ）、家具（マルテラ）、インテリア小物（アーリッカ）等の産業が発展して来ています。

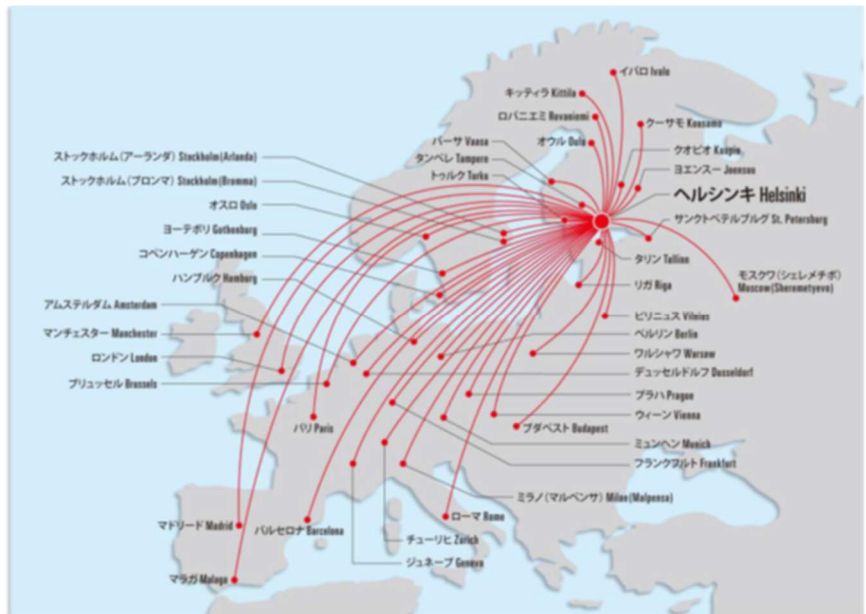
極東の日本から見ると遠いヨーロッパの国にですが、1983年当時国営のフィンエアが初めて日本とヘルシンキを結ぶ直行便を開設した。当初はベーリング海上空を通過していたが1991年のソビエト崩壊によりシベリア上空を通過できるようになり更に時間短縮（約10時間）されています。



現在、日本からは成田、セントレア、関西、福岡と4都市から直行便が運航されている。

2013年から日本航空が成田から就航し現在は最大1日5便が日本とフィンランドを結んでいます。ヘルシンキはヨーロッパのゲートシティとして40以上のヨーロッパ各都市へ同日乗り継ぎ便を運航している。これらの多くの就航都市が日本から最短、最速で到達できます。

地勢学的に見てフィンランドは日本から一番近いヨーロッパであり、近年はサンタク羅斯、オーロラ、ムーミン、サウナ、森と湖の国として注目されています。



また、海外では世界初となるムーミン村の建設計画が埼玉県飯能市及び西武鉄道グループの協力の元に計画が進行中です。



注：フィンランド地図は大使館広報部資料、航空路線図はJAL資料から引用

映画と景観への旅

土岐 寛

古都ストラスブールと「シルビアのいる街で」

(2007年 スペイン・フランス ホセ・ルイス・ゲリン監督 85分)

ストラスブールは二度訪れている。1989年は研究仲間と一緒に仕事があった。街を歩く時間もなかった。モーリス・ラベル号でパリ北駅へ向かったが、パリは革命200年で賑わっていた。2007年は別の目的があった。個人的な都市調査である。最近のストラスブールは、次世代型路面電車ユーロトラムを中心とした都市再生で知られている。

1989年とは逆にパリ東駅から開通したばかりの新幹線TGVに乗り、田園風景を楽しみながらストラスブールに近づいた。国境の町・ストラスブールはドイツとフランスの間で揺れ動いた歴史を持っている。フランス人として生まれたのに、ドイツ領に変わってフランスとの戦争に駆り出されるといった悲しい出来事もあった。

世界遺産の大寺院や旧市街のある古都だが、特殊な歴史のせいか、独特の自由と無国籍的な空気が流れているともいわれる。現在の公用語はフランス語だが、コミュニティや家庭などではアルザス語がまだ健在のようだ。「シルビアのいる街で」の舞台がストラスブールでなければならなかったのは、そうした事情による。



画家志望の青年が6年前に愛し合って別れた若い女性シルビアを探す映画である。シルビアは青年の記憶の中にしかなく、簡単には見つからない。青年はある女性がシルビアに違いないと思って、後を追う。古い街の表通りや路地裏に二人の靴音が響き渡り、姿が見え隠れする。ユーロトラムの広い窓ガラスに二人が一瞬映り、歪んで遠ざかっていく。教会の鐘の音が空気を震わせ、街の底を滑り流れていく。

セリフはほとんどない。青年やカップルや女性たちが交わす視線、音としては聞こえてこない会話と息づかい、光と風と都市の生活音、暮らしのリズム、それらが主役のドキュメンタリー作品のようにも見える。結局、シルビアに違いないと思った美しい女性もシルビアではなかった。

スタイリッシュな映像詩のようでもある。興味深いのは、ストラスブールという都市が主役のような面持ちがあることだ。ユーロトラムがゆったりと走っている。古い街並みに市民の日常生活が見え隠れしている。そこを青年と若い女性が街とダンスするようにステップを踏んでいる。街がステージになっている。

ストラスブールは都心部を歩行者、自転車、ユーロトラムだけにして、クルマを排除したトランジットモールにするなど、都市政策でも注目されているが、映画はそれをうまく活用している。

6年前に愛し合ったシルビアが今もこの街にいるという保障はない。青年の記憶は幻ないし白昼夢だったのかも知れない。シルビアが実在したのかどうかさえ分からない。シルビアは象徴なのか記号なのか。シルビアはストラスブールという街自体かも知れない。

ストーリーらしいものはなく、具体的な達成もないが、徒労感はない。心地よい微かな疲労感とでもいった方がいいかも知れない。スペイン人のホセ・ルイス・ゲリン監督は、通常の映画情報を削ぎ落とし、視線の冒険ないし視線の叙事詩を意図したという。

青年役はフランスの若手俳優グザヴィエ・ラフィット、シルビアに間違われる女性役はスペイン出身のピラール・ロペス・デ・アジャラ。草食系の美男美女である。

＜L F Jブックレビュー50＞

『日本の地霊（ゲニウス・ロキ）』鈴木博之著 1999年刊 講談社現代新書
 『東京の地霊（ゲニウス・ロキ）』鈴木博之著 1990年刊 文芸春秋

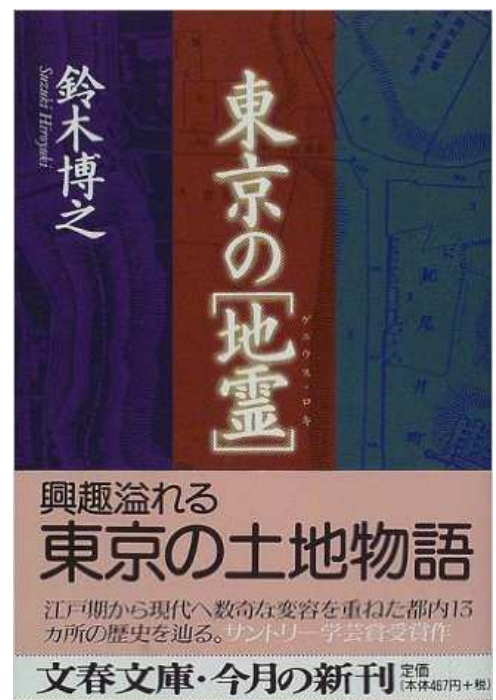
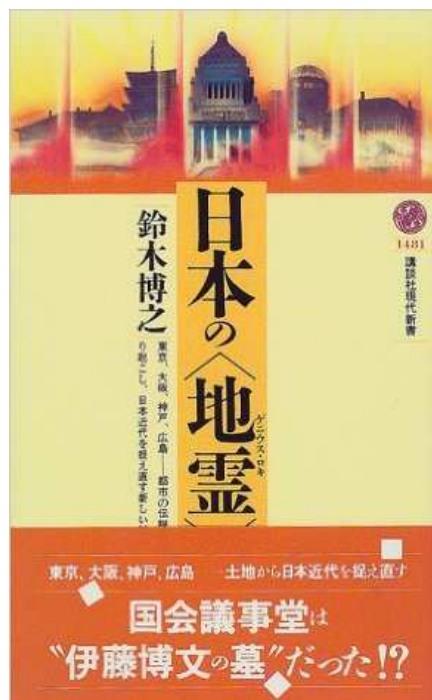
まちあるきをすると、その土地がもつ言葉に表現できない独特な雰囲気のようなものに出会うことがある。それは国内であれ海外であれ、どこでも体験し得るものではあるが、それを客観的に立証できないのが残念でならない。従って、ひとそれぞれがまたそれぞれの体験をしているのではないかというこの雰囲気の何かについて語ることは大変困難であろう。

この何かとは「ゲニウス・ロキ」である。ラテン語で、ゲネウスは「人を守護する精霊もしくは精気という概念」であり、即ちゲニウスは「守護の霊」といい、ロキとは「場所」ないし「土地」という意味である。従って、ゲネウス・ロキを日本語に翻訳すると「地霊」となる。今時そんな非科学的なことを問題視することはないのではないかとされる向きもあるかもしれない。しかし、人間が長年かかわってきた土地柄には何らかの雰囲気が醸し出されるのである。「生活の場は生産と住居が結び付いたものだった」のであるが、近年、どこもかしこも近代化という名の下に街並みが同じような建物に埋め尽くされて久しい。まさに「近代の成立こそ土地から個性を奪った最も大きな出来事であった」とはいえ、同じチェーンストアが立ち並んでいながらも、その土地柄は微妙に異なっていることに気付き始めハッとすることがある。

『日本の地霊』では、筆者は第1部で「場所の依り所」として、国会議事堂が何故あのような形に造られたのか、日本近代建築の出発点をなしたその精神的なものが、何故連続と引き継がれてゆくのかなど等をこの地霊というコンセプトでひも解いてゆく。そして、第2部では「日本の＜地霊＞を見に行く」として、三菱を興した岩崎家の事例を紹介し、明治天皇の聖蹟から地方の鹿鳴館たる建築物に言及し、神戸における川の運命、東武鉄道を興した根津嘉一郎の常盤台がどのように出来上がったかをその地霊を介しながら解き明かしてゆく。また、筆者は建築家という目で日本住宅の特徴を「我が国の部屋、特に座敷は庭とセットになって初めてスタイルを獲得する」と指摘し、西欧は空間としての性格が部屋に意味を与え、日本は場所を軸として部屋を展開するという。

さて、著者はこの書の前に『東京の地霊（ゲニウス・ロキ）』（1990年刊）を出しており、港区六本木、千代田区紀尾井町、文京区護国寺、台東区上野公園、品川区御殿山、港区芝、新宿区新宿御苑、文京区椿山荘、中央区日本橋室町、目黒区目黒、文京区本郷、世田谷区深沢、港区広尾という13か所を取り上げ、それぞれの地霊からその土地の謎を解き明かす。

東京という大都会をこのような視点でじっくりと“まちあるき”を行うことにより、同じように見えていた大都会も肌理の細かい土地柄であることに気付きはしまいか。「ゲニウス・ロキ（地霊）」というこのような視点こそが“景観から考えるまちづくり”に非常に大切な観点であり、それは近代化の結果が現代である以上、紋切り型ではない豊かな多様性を景観まちづくりに活用できるのではないか。（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑪「みかんと太陽とトライアスロンの島」

愛媛県の瀬戸内海に浮かぶ「みかんと太陽とトライアスロンの島」、中島。平成17年1月に松山市と合併したものの、そのキャッチフレーズは現在も人々の心の中に生きている。

現在、私は20歳であるが、幼少の頃に愛媛県の70市町村が20の市町にまで減少した。その際、中島町は北条市と共に松山市に編入合併されたのだが、「温泉郡中島町」から「松山市中島」に年賀状の住所が変わったことを当時は不思議に感じたものだった。



日本の国土38万平方キロメートルに対して、中島は38平方キロメートル。1万分の一である。しかしながら、早生伊予かん市場において、中島地区だけで全国シェアの100分の一を占めていたことは驚きに値する。味よし、香りよしのみかんは、中島の基幹産業だ。以前と比べると早生伊予かんの生産は減少したが、現在は、紅マドンナやせとか、カラマンダリンなどの新品種が誕生し、時代のニーズに対応した改良にも力を入れている。

島おこしの一環として始まった中島トライアスロンは、30回を超える長い歴史をもつ。これは、全国で三番目に古い。「ふれあいトライアスロン」を合言葉に、島の人々と鉄人との心の触れ合いを重視した大会は、島の夏をいっそう盛り上げる。キャッチフレーズにも「太陽」とあるように、アスリートたちは、豊かな自然の中で魂の汗を輝かせる。



トライアスロン中島大会



中島全景

ところで、地中海の一部を構成するエーゲ海をご存じだろうか？ 実は、瀬戸内海は、このエーゲ海に比すべき国立公園であると古くから指定されているのだ。「秋天のしずくのような島へゆく」という句が「瀬戸内海俳句大会」最優秀賞に選ばれていることから、瀬戸内海に浮かぶ島々の美しさがうかがい知れるだろう。5月下旬～6月、中島には姫ボタルが乱舞する。

文化遺産が多く、古くから島人が住んでいたことが証明されているということも、中島の数ある魅力のひとつである。中でも覚えておきたいのが、忽那義則の代に最も栄えた忽那水軍の活躍だ。鎌倉～室町時代、瀬戸内海は今でいう高速道路の役割を果たしていた。忽那水軍のガイドに沿って船で運んでいたことから、忽那水軍は「水先案内人」とも呼ばれる。建武の新政後（南北朝時代）、後醍醐天皇の皇子が中島の神浦へやってきたのを迎え入れたのが義則である。彼の功績を称えた記念碑は、現在もそのままの形で残っている。

また、もうひとつ代表的な文化遺産として、1180年より始まった源平の闘い（治承・寿永の乱）の最中に、源義経が休憩した「鎧かけ松」が挙げられる。これらは、中島が古くより日本の歴史に直接かかわっていたことを証明している。



鎧かけ松

さて、すこし時代を遡ることになったが、今の中島は島外の人々の目にどう映っているのか？ 和歌山県出身の演歌歌手・坂本冬美さんは、「中島は私のふるさとです」と言う。平成元年より、坂本冬美さんは中島で合計6回のコンサートを行っているが、なんと二時間ノーギャラで歌うというのだ。これは一体、どういうことなのか。「坂本冬美さんレベルの歌手ともなれば、普通に考えて、ノーギャラで歌うなどありえない！」多くの人はそう考えるのではないだろうかと思う。しかしながら、彼女の美しい瞳に映る中島は、豊かな自然と人々の温かさにあふれる、それだけ魅力的な島なのだという。坂本冬美さん唯一の歌碑がある中島へ、ぜひ足を運んでみてほしい。



粟井地区にあるお茶畑



西岸から望む夕日



10月初旬の秋祭りに行われる伝統行事「やっこ振り」

※愛媛県観光情報サイト
「ちゅうよ観光ナビ」から引用
[http://www.pref.ehime.jp/
chu99914/navi/shima/nakajima/](http://www.pref.ehime.jp/chu99914/navi/shima/nakajima/)

株式会社 **Gonmatus** 所属
夢実現コーチ 尾脇優菜

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan